

## フィラコリア2009に参加して

大沼幸雄



7月30日から8月4日(6日間)ソウルのCOEXで開催されたフィラコリア2009に参加した。これはFIP(国際郵趣連盟一本部チューリッヒ)国際展である。東京-ソウル間は、利便性を考えて、空港は羽田-金浦を使用しているアシアナ航空の便を利用した。料金は往復5万円弱、ホテル代も4つ星で一泊一部屋11万ウォン(約9千円)である。ウォンは持ち直しつつあるが、春先には2年前に較べて対円レートが、半値以下に下落したので日本人にとっては、かなりの割安感がある。

COEXは、巨大なコンヴェンション・エクジビション・センターで、それ以外に、ショッピング・モール、博物館、ホテル、映画館、水族館、免税店が集まった巨大なコマーシャル・コンプレックスである。初日、ホテルからタクシーで「COEXへ」と言ったら敷地の一角で下ろされたが、余りに巨大な施設で迷ってしまい会場入口を探し当てるのに一苦労をした。標識はハングル語で、まるで見当がつかない。英語は、案外と通じにくい。

ともかくたどり着いたら会場のインディアン・ホール前では、すでにオープニング・セレモニーの開催中。民族衣装の歌手が、すばらしい声で民族音楽を披露していた。知識経済省の副大臣の挨拶、韓国郵政の総裁、FIAP会長などの挨拶のあとテープカットがあり、いよいよ開幕となった。



会場のCOEX



展示会場の光景

6日間の会期のうち、市内見物に出かけた1日以外は、常時、会場へ通い詰めた。

今回の印象であるが、

第一に、韓国は先進国化したからであろうか、 中国、タイなどに較べると参観者がまばらであ る。郵趣の人気は、先進国化と反比例するらし い。

第二に、韓国は、テーマティクが盛んな国である。今回のテーマティク展示の53作品のうち実に半数の26作品が韓国からの出展であり、全体で、金賞以上(90点以上)は8作品であったが、そのうち7作品を韓国勢が占めて圧倒的な強さを見せた。作品のレベルも総じて非常に高い。地元だからとの見方もできるが、必ずしもそうは言い切れない。一昨年のタイでは、全体で30作品展示に対しタイからの出品がない。昨年のタイペイでは、全体で29作品のうち台湾から6作品の参加があったが、金銀賞(81点)が最高であった。

韓国勢の中で、とりわけ27才のキム君は、この若さでテーマティク唯一の大金賞(96点)に輝いた。アジア・テーマティク界のライジング・スターとも言える。

彼とは、ワシントン、バンコック、洛陽そして 今回と4回目の顔合わせであったが、現在、北京で カルチャーセンター的な事業で成果を上げるなど 事業家の一面も持ち合わせる若さと魅力にあふれ



ソウル中央郵便局

第三に、韓国郵政の力の入れ方が並みではない。ソウル中央郵便局の建物は、明洞(ミョンドン)のど真ん中にバルタン星人ともマジンガるスとも見える威容を誇っているが、郵趣に入れるで、中年のがある。一昨年のバンコクでもでにフィラコリア09の予告編で、大パーティンコンでは、大の後の大不況で力を抜いていたが、その後の大不況で力を抜け、からしたところ、開会式、歓迎大けなが、たところ、開会式、歓迎大けなが、たところ、開会式、歓迎大けなが、たいで楽しませてくれた。またでディン「をは、カタログ、パルマレスをあまたであく出し物で楽しませている。子供たちを対象にし関いでありまります。次世代に郵趣に関いてもらおうという並々ならぬ意欲の現れであります。

アジア・テーマティク郵趣クラブのメンバー 左から、川辺、榎沢、大沼、キム 1人おいて、 李会長、内藤 1人おいて 勝井 (敬称略) 今回は、タイペイからの参加者がいなかったが、後日、参加の予定とのこと。ここで、各自自己紹介のあと中国の李伯琴氏(イーグルのテーマでフィラニッポン '01にて金賞受賞)を会長に選出、副会長、役員、事務長などを置くことを決めた。ともかく極東アジアでテーマティクの横のつながりができた意義は大きい。来年は、中国で展示会を開きたい、フィラニッポン2011で集ろうといったことが話し合われた。

なお、「テーマティク出品者の会」(会長:内藤陽介)メンバー有志、江村清、川辺勝、榎沢祐一の諸兄もフィラコリアの見学に参加した。

第二に、ワンフレーム・セミナーへの参加である。講義は、FIAP(アジア郵趣連盟)の前会長と現会長の2両トップが率先して行った。要約すれば、ワンフレームの作品制作の鉄則は、ワンフレームに「最適な狭い範囲のテーマを選定せよ」ということである。いくらでも拡大できるテーマをワンフレームで表現するのは認められない。出来合いの5-8フレームの作品から、1フレームを取り出すと言った安易な方法も厳禁である。セミナーのあとのQ&Aでは、適切な例として解説された作品についても、「拡大できるのでは?」と質問が飛び出し、このコンセプトはまだ確立にはまだ時間を要する印象である。

第三に、彩流社の「切手が伝えるシリーズ」が、韓国で翻訳・出版されることが彩流社とハヌル社間で合意され、彩流社の塚田営業代表、著者(内藤陽介氏と小生)が先方の幹部とソウルでお目にかかることができた。ベートーヴェン、モーツァルト本が、海外で出版されることが夢であったので、その第一歩を踏み出せて非常に嬉しい。

末筆になるが、今回、国際展では初めての金賞

(93点)を頂く ことができた。 パルマレスの次 の日に、チャン 氏始め合計三名 の審査員から講 評を頂いた。テ ーマティクの面 白さは、アイデ ィア次第で無限 に楽しめる点で ある。今回の講 評を糧にして、 更なる発展を目 指したいと思 う。

以上

